

【1.体制】

消化器内科の常勤医師は2名、非常勤医師は2名。消化器内外科外来は週4日であり、肝臓専門外来を熊本大学病院から派遣の非常勤医師が週1日担当した。また、内視鏡検査を非常勤医師が週1日担当した。

内視鏡検査実績

(件)

	2024年度	2023年度
上部消化管（処置、検診を含む）	2,291	2,264
下部消化管（処置を含む）	572	559
ERCP（処置を含む）	0	1
超音波内視鏡	0	0

内視鏡治療実績

(件)

	2024年度	2023年度
食道ESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）	0	0
胃ポリペクトミー（EMRを含む）	3	6
大腸ポリペクトミー（EMRを含む）	150	134
胃ESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）	0	3
大腸ESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）	0	0
食道胃静脈瘤治療（EVL, EIS, APC）	0	0
内視鏡的止血術（上部）	32	9
内視鏡的止血術（下部）	2	1
異物除去	1	8
食道狭窄拡張術（ステント、バルーン）	0	1
PEG造設	3	3
PEG交換	4	6
内視鏡的胆道ステント留置術	0	0
内視鏡的乳頭切開術	0	1
内視鏡的採石術	0	1

【2.取組内容と実績】

新型コロナウイルス感染の影響は遷延したが、内視鏡検査件数は上部・下部消化管ともに増加した。また、内視鏡治療件数は大腸ポリペクトミー、内視鏡的止血術（上部・下部）などが増加した。

入院症例の高齢化に伴い、何らかの合併症を有する症例が多かった。原疾患は治癒しても、合併症のために入院期間が長くなるケースが多かった。内視鏡手術や化学療法症例が減少し、緩和ケアを行う症例が増加した。新型コロナウイルス感染関連の症例は少ないながら皆無ではなかった。消化管疾患においては、食道異物・咽頭異物、出血性胃十二指腸潰瘍、大腸憩室出血、虚血性大腸炎などの症例が増加した。肝胆膵疾患においては、急性胆管炎、急性膵炎などの症例が増加した。

主な消化器疾患入院症例数（主病名のみで重複なし）・（例）

	2024年度	2023年度
逆流性食道炎	0	0
腐食性食道炎	0	2
マロリー・ワイス症候群	1	0
食道・胃静脈瘤	0	0
食道異物、咽頭部異物	3	1
早期食道癌	1	0
進行食道癌（術後含む）	0	2
食道胃接合部癌	1	0
胃毛細血管拡張症	0	2
胃ポリープ	2	4
早期胃癌（外科転科症例を含む）	0	3
進行胃癌（外科転科症例を含む）	0	2
幽門狭窄症	0	0
十二指腸ポリープ	0	0
十二指腸狭窄症	1	0
十二指腸乳頭部腫瘍	0	0

(出血性)胃十二指腸潰瘍	8	4
急性胃腸炎	1	0
急性胃拡張	0	1
大腸ポリープ	32	35
空腸消化管間質腫瘍	0	0
回腸炎	0	0
大腸癌(腺腫内癌、外科転科症例を含む)	5	5
大腸憩室出血	11	6
感染性腸炎(出血性腸炎を含む)	3	3
イレウス(サブイレウスを含む)	4	2
虚血性大腸炎	11	7
潰瘍性大腸炎	0	0
大腸憩室炎	1	2
偽膜性腸炎	0	0
上腸間膜動脈症候群	0	0
S状結腸軸捻転	0	0
S状結腸穿孔	0	0
直腸カルチノイド	0	0
直腸神経内分泌腫瘍	0	0
消化管出血(出血源不明)	7	10
急性虫垂炎	0	0
(癌性)腹膜炎	0	0
腸間膜脂肪織炎	0	0
薬剤性下痢症	0	0
肝障害	1	0
急性肝炎	0	1
自己免疫性肝炎	0	0
転移性肝腫瘍	0	1
肝硬変(肝不全を含む)、腹水	6	6
肝性脳症	2	3
肝細胞癌	2	2
胆管細胞癌	0	0
肝膿瘍	2	1
胆石胆嚢炎(外科転科症例を含む)	0	1
総胆管結石性胆管炎	0	4
胆石性膵炎	1	0
胆石疝痛	0	0
胆嚢癌	0	1
急性胆嚢炎	2	2
急性胆管炎	5	1
胆管癌	2	4
急性膵炎(慢性膵炎急性増悪を含む)	5	3
膵臓癌	1	5
食欲不振、栄養障害	4	1
高度貧血(大球性貧血を含む)	9	6
急性アルコール中毒	1	0
舌癌術後	0	1
嘔吐症	0	2
食道裂孔ヘルニア	1	1
胃石症	0	1
門脈圧亢進症性胃症	0	1
膈ヘルニア嵌頓術後	0	1
便秘症	0	1
その他(2024年度:新型コロナウイルス感染5例を含む)	103	119

【3.今後の課題】

新型コロナウイルス感染関連の症例はコロナ禍の時期と比べるとかなり減少したが、皆無ではない。今後も感染症対策を十分に継続する必要がある。また、スタッフのマンパワー不足の影響もあり、年々緊急内視鏡検査および治療症例は減少している。次年度から常勤医師が3名に増えるので、症例数の維持、増加を図りたい。済生会熊本病院との連携を密にし、地域住民の方々に質の高い医療を提供する必要がある。